



## 藤本卓さんのこと

平野和弘 (元東洋大学教授)

昨年9月、生活指導研究運動の理論的・実践的リーダーであった竹内常一さんが亡くなりましたが、じつは、それに先立つ3月、竹内さんの後継者と目されていた藤本卓さんが亡くなりました。

藤本さんは、50年代の生活指導論争で宮坂哲文さんと論争した小川太郎さんが1971年まで在職された神戸大学出身で、私が大学院に入った時博士課程の1年に在籍していらっしゃいました。修士論文はヴィゴツキーの流れを汲むレオンチェフの研究で書かれています。

その頃はまだ、研究の方向性を模索されている段階で、坂元忠芳さんと竹内さんのどちらに師事するか考えておられました。ちなみに坂元さんは都立大、竹内さんは國學院大なので、制度上の指導教官は東大の堀尾輝久先生です。

坂元さんは、生活綴方の伝統を受け継ぐ作文教育の研究運動をリードする存在で、ポストモダンの理論なども貪欲に吸収しながら精力的に研究を進めておられました。

竹内さんも哲学のみならず人文・社会科学全般に広く目配りしながら研究を進めていらっしゃる注目の研究者でした。

戦前日本の具体的な教育現実から、日本の教師たちが独自に生み出した教育思想をどのように継承・発展させていくかということは、戦後日本の教育の理論と実践における肝であり、現場の教師たちと共に新しい教育実践を生み出す最先端で活躍されていたのがこのお二人でした。

東大教育学部、なかんずく史哲研究室は、勝田守一さん以来の教育科学研究会（以下教科研と略）の牙城で、生活指導論争以来、全国生活指導研究協議会（以下全生研と略）とは距離がある空気が漂っていました。

藤本さんが、あえて竹内さんを選んだ理由を直接伺ったことはありませんが、「教科研は自前

の実践を持っていない」とおっしゃったことがあり、印象に残っています。

### 生活指導論争の中で

1956年の教科「道徳」の特設を契機として、1958年全生研が設立され、生活指導論争が展開されることとなります。

まだ20代だった若き竹内さんは、60年安保の大衆的盛り上がりを背景に、学習論的な生活指導理解に対して生活訓練論の持つ独自の意義に着目した生活指導概念を対置しました。

長い宗教戦争の末に近代公教育概念を確立した欧米では、信仰の自由を個人の権利の問題とすることで宗教的な対立を公的な場に持ち込まない解決策をとりました。その帰結として、信仰の価値観と密接する道徳教育は各家族が第一義的な優先権を持つ領域と思念するのが近代公教育概念の基本となっています。

日本の場合、信仰の自由との緊張関係を共通前提として持っているとは必ずしも言えないにもかかわらず、近代公教育概念をそのようなものとして理解する限り、「修身」の復活のような「道徳」の教科化に反対するのは当然としても、公教育が道徳教育にどこまでどのように関与すべきかは、悩ましい問いであり続けました。その中で、学級集団づくりを核とする生活指導研究運動は、どこにもモデルのない中、日本の教育現実と格闘しながら、独自の理論と実践を構築してきました。

全生研や高生研は、現場の教師たちの実践的なニーズに応えるものとして一定の存在感を示してきましたが、他の民間教育研究団体と共に生活指導概念を深めていくような関係をうまく作り出せてきたとは言えません。生活指導論争以降、生活綴方の流れを汲む学習論的な生活指導理解と、生活訓練論を独自に深めることを追

求する生活指導研究運動は、それぞれの道を歩いてきたように見えます。

そういう意味で、竹内さんは、生活指導研究運動のリーダーとして広くその名を知られてはいますが、その仕事が教育学研究全体に対して持つ意味を、全生研や高生研の外側の研究者や教師たちに適切に理解されているとは言えない状況があります。

藤本さんや私が大学院生活を送った 70 年代末から 80 年代は、戦後 30 年を経たのみならず、産業革命以来の近代が大きな曲がり角を迎えた時代でもあり、校内暴力、管理教育、いじめ、不登校…と日本の学校が急速に閉塞感を強めていった時代でした。

竹内さんが 1976 年に著された『教育への構図』は、そうした時代状況を先取りする先見性に満ちた著作でしたが、それに対応する新たな生活指導の課題の模索の書でもありました。そういう時期に藤本さんは竹内さんに師事し、その後継者としての道を歩み始めたのです。

## 生活訓練論の教育本質的な意義の解明

教科研の牙城である東大史哲にありながら、学習論的な生活指導理解の啓蒙主義的な限界を強く意識し、竹内さんが提起した訓練論の独自の教育本質論的な意義の解明をその生涯の課題とされたのが藤本さんでした。

しかし、新たな模索を始めていた竹内さんに対する、藤本さんの内側からの理論的な問い詰め方には、さすがの竹内さんも音を上げるほどの鋭いものがあつたそうです。

全生研の実践にはある種教条主義的とも見られてしまうような一面があり、そうした点が、しばしば、他の民間教育研究運動団体からも批判の対象とされたりしていました。しかし、そうした批判に対しては、皮相な否定的現象を取り上げての批判では駄目で、最良の部分に刺さる批判でなければ本物の批判にはならない、というのが藤本さんの応えでした。

80 年代前半、藤本さんをリーダーとする思春期の発達課題調査を目的とする教育学会のプロ

ジェクトチームは、中学教師の関先生の協力を得て、東京下町の一軒家を拠点とした参与観察を実施しました。その成果は『教育学研究』に「現代の思春期葛藤と教育の課題」として発表され、それを踏まえて『生活指導』誌に上・中・下の 3 回に分けて掲載された『私的トラブルへの幽閉』を深く超える—今日の日本社会をどうとらえるか—が執筆されることとなります。

タイトルの付け方の出色のセンスにも見られるように、藤本さんは文筆の徒としての自負と責任感、才能において、他の若手研究者の追隨を許さないものがありました。もちろんそれは、文章表現のテクニックだけのことではなく、内容的にも同時代の社会批評としても出色のもので、今読んでも少しも色褪せていません。

その後、藤本さんは高生研の運動に深く関与していきませんが、その試みは、竹内さんの原点の著作に言及しながら、それを現代的に深めていこうとするものだったように思います。

生活指導研究運動の理論的・実践的リーダーであった竹内さんは、学校教育の現場の実践に深く関与していたがゆえに、深まる一方の困難な状況への現実的な対応に心を砕かざるをえなかったように、私には見えます。

一番の理解者であることは互いに認め合う間柄であり、深い対話は終生続いたと思いますが、それゆえ若い藤本さんが先立ってしまったことに対する竹内さんの悲しみはさぞやと想像します。時に耳に痛いことを言って追及してくる藤本さんに対して、竹内さんは鷹揚に接していたように見えます。

藤本さんの急逝を受けて、大学時代からのご友人の藤本英二さんが中心となって、『藤本卓教育論集—〈教育〉〈学習〉〈生活指導〉—』（鳥影社刊）が出版されました。（ぐんま教育文化フォーラムに寄贈）